国旗が垂れる

尾辻克彦

国旗が垂れる

尾辻克彦

中央公論社

国旗が垂れる

定価一〇〇〇円

昭和五十八年一月二十日初版発行
昭和五十八年二月二十日再版発行

著者　尾辻克彦

発行者　高梨　茂

印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替 東京二-三四

©一九八三 検印廃止

目次

国旗が垂れる　5
やめる　19
湯の花　53
露地裏の紙幣　75
風の吹く部屋　123
殴られる男　163
バーバー「肌ざわり」　221

装幀　赤瀬川原平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国旗が垂れる

国旗が垂れる

前略　お元気ですか。今年の正月、私は玄関に国旗を出しました。先生はたしか国旗が嫌いでしたね。私が正月に国旗を出したなんていうと不愉快になるかもしれませんが、お許し下さい。でも国旗って、いいもんですよ。あ、ごめんなさい。先生は思想とか考え方というものがしっかりしていらっしゃるので、私などはかないませんが、でも今年になっていきなり国旗を出したりして、私にはやはりいいかげんなところがあるのでしょうか。私は本当は国旗が好きだったのでしょうか。それを先生に批判されるのが恐いので、私もいっしょに嫌いなふりをして、いままでずうっと出さずにいたのでしょうか。そうかもしれないけれど、自分ではよくわかりません。だけど今年の正月は、とうとう玄関に国旗を出してしまったのです。何だかふっと出したくなって、出したのです。出してしまったものを先生に批判されるのは仕方がありませんが、でも国旗を出したからって、絶交とか、そういうことはしないで下さい。私には考え方の筋道がわからないのです。先生の頭をお借りしないと、安心できないのです。それがなくては不安なのです。だからどうしてもご報告したいのです。

今年の正月、私が玄関に国旗を出したのは、たぶん私が玄関のある家に引越したからだと思い

ます。これ、変ないい方だと思われるかもしれませんが、でもよく考えるとそうなのです。

私、去年の夏に団地を出ました。先生にも一度来てもらった、あの高島平の団地です。友子とは別れたのです。友子はまた歌手になりました。いやなったかどうか、私はもう知りません。声があっても性質があれだから、ちょっとなりにくいでしょう。だけどなるといって出て行きました。私はそのあともしばらくあの団地にいたんだけど、とうとう去年の夏に引越しました。五年前にせっかく当った団地を手離すのは本当にもったいなかったのだけど、やはりそこがもう何だか廃墟みたいに感じられて、うんざりしてきたのです。廃墟の匂いというのがどうしてもその団地の部屋の中に立ちこめていて、体が腐っていきそうになったのです。

あ、嫌な話でごめんなさい。本当は国旗の話です。私、友子とその団地にいる間は、国旗なんて一度も出したことはありませんでした。とてもそんな気持になれなかった。いや気持は別にしても、だいたい国旗というものを持っていませんでした。いや持っていたにしても、団地には玄関というものがない。だから国旗を出そうにも出しようがない。団地にあるのは入口です。あれは玄関を兼ねてはいるけど、お勝手口も兼ねている。いやお勝手口を差別するわけではないのですが、あの団地の入口には「玄関」というときの、あの何というか、晴れがましさみたいなものがない。あの団地の入口のあるコンクリートの通りというのは、表通りというよりは通路です。先生はまだ団地ですね。あ「まだ」なんて、ごめんなさい。でもあの団地のあそこというのは、ビールビンの空いたのや、新聞紙の束ねたのや、出前のドンブリなどを出しておく通路だから、あそこに国旗を出したとしても通行の邪魔になって怒られるだけだ。あれを見ていると、むしろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

団地の表側というのは、日の当るテラスの方だと思うのです。だけどこれもやはり玄関ではない。あの団地の日の当るテラスに国旗を出したりしたら、きっと布団や洗濯物と並んで国旗を干しているように見られてしまう。やはり団地には国旗を出す場所がないのです。先生は、どう思いますか。先生は本当に国旗を出さないのですか。出せないのですか。

去年の夏から私は老母と二人で暮すことになりました。友子は三十二歳でした。老母は七十七歳です。私は何かホッと肩の力が抜けて、心なしか動作がゆっくりとなりました。毎日のご飯がとてもおいしい。だいたい私が作るのですが、ホウレン草のおひたしにしてもマグロの照焼きにしても、ゆっくりと噛むことができる。引越して来たのは田無市の外れの方です。ちょっと行くと畑がある。でもいちおう駅の近くの木造の小さな一軒家です。小さいけれど一人前に縁側があり庭があって、庭には半分ほど日が当る。その庭に夕立でも降るときには、その音が古い縁側にはずみながら体の中にしみ込んでくる。友子との団地では、とてもなかったことです。私は団地からこの古い家に引越して来て老母と二人暮しながら、いつの間にか幼児の気持が蘇るのです。ガタピシとした木造の雨戸をカラカラと開けるだけでも、幼児の気持が復活してくるのです。そういう復古調の雨戸を開けたり閉めたりしながら、秋が過ぎて冬になり、十二月、その一軒家でのはじめてのお正月の用意を考えていたら、正月には玄関に国旗を出そうと思った、これは自然のなりゆきではないでしょうか。私は自然にそう思ったのです。

お正月はやはり日の丸の国旗です。門松もしめなわも、それからお餅もおせち料理もありますが、お正月の空気というのを象徴しているのは国旗です。玄関の付け根のところから地図の線路

のような旗竿が伸びていて、その先に金の玉が近所の景色をツルツルと映しながら輝いていて、そこから白地に赤い日の丸が、静かに、うなだれたように垂れ下がっている。

お正月の国旗というのが風に吹かれているのは見たことがありません。お正月の国旗はいつも静かに垂れ下がります。国旗を斜めに傾けてそっと出すと、そこで空気がピタリと止まる感じ。しかもそのお正月の空気というのは、工場の煙が止まり、自動車も止まり、通行人の吐く息も止まり、一年中で一番キレイな空気なのです。東京でも青空が地平線まで青くなり、遠くの山並が顔を洗ったように見えています。物音一つせず、空気の底が静まりかえり、みんな点々とある家のその点の中に閉じこもって、町の全体が白地に赤い日の丸となって、静かに、うなだれるように垂れ下がる。

日本の国旗はお正月のためにあるのだと思います。白地に赤い日の丸の旗、あの赤というのは、本当は白地のためにあるのだと思います。あれは静かな赤です。冷めた赤、むしろそれを包む白地の方が柔らかく、押せば引くようなものに感じられる。

この白地に関しては、前に先生の仕事場に行ったときのことをどうしても思い出します。先生は大きな日の丸の旗を買って来ていて、その赤い丸のところを切り抜いて丸い座布団を作っていて、それに坐ってお仕事をしていましたね。私は驚きました。その赤い座布団もさることながら、その後の壁に画鋲一つで留められて垂れ下がっていた白地の方に驚いたのです。先生は何か思想があってのことでしょうが、あのときの透明な丸を抱えて垂れ下がった白地というのが、私には純粋の白地を通り越して、何か、何というか、危険というか、存在の危険というか、いやこんな

ことやはり私にはいえませんね。でも世の中に何かが存在するというのは非常に危険なことだと、存在とはそのまま危険のことだと、そういうことが画鋲で留めて垂れ下がっていたのです。でも先生は何も説明してくれなかった、ただ赤い座布団をピタピタと叩いて、こんどは黒い座布団を作ろうとか、そういうことをいっていました。私はその画鋲一つで垂れ下がった白い物を見ながら、空間の恐怖だと思いました。ちょっとこれは白地ではないと思いました。いや白地には違いないけど、それはお正月の空気にはならないと思いました。やはり真ん中に赤い日の丸があって、それを斜めに垂らすと赤い丸がちょっとだけのぞいて中に隠れる、そういう白地が本当に静かなお正月の空気です。

で大晦日も近くなり、私は国旗を買いに行きました。デパートに行けばあるのでしょうが、私の住んでいる小さな町にはデパートがない。だけど別にデパートでなくても、国旗はふつうの店で買えばいい、そう思って町に出たけど、はて？　と思いました。ふつうの店といっても、国旗はどの店に売っているのか。先生ならどこに行きますか。私は荒物屋に行きました。何故かわからないけど、当然のように足が向いたのです。たぶん旗竿のせいかもしれません。荒物屋には鍋があるし、バケツがあるし、包丁があるし、箒がある。縄もある。竿もある。だから旗竿もあるだろうし金の玉もありそうな気がする。そうすれば国旗もいっしょに小さく畳んで、ボール箱にでも入れて売っているはず……。

だけど荒物屋に国旗は売っていませんでした。店の人が、

「うーん……国旗は……ないねえ……」

といっています。ショックでした。荒物屋には家庭内のだいたいの日用品が揃っているのに、何故国旗がないのでしょうか。

私が茫然として店を出ると、後でまだ店の人が、

「国旗は……ねえ……」

と呟いています。こんな商品、荒物屋の人もはじめてらしい。私は茫然としながら考えました。荒物屋のことは雑貨屋ともいう。国旗というのは一国の象徴たるものだから、それが雑貨の中に並んでいるはずがない。たしかにそうやって筋道立てて考えていくと、荒物屋には国旗がなくて当然なのです。だけど私の方は当然置いてあると思った荒物屋に国旗がなかったものだから、そのショックで慌ててしまい、それではいったいどんな店に置いてあるのかという見当がまったくわからなくなってしまったのです。いつも買物に出て来ている町が、まるではじめて来た町のように思われました。どこに何がひそんでいるかわからない。

荒物屋の隣には八百屋がありました。八百屋に国旗はたぶんないでしょう。その隣には魚屋がありました。魚屋でも国旗は売ってないでしょう。そのくらいのことはわかるのです。おそらく靴屋にも国旗はないでしょう。乾物屋にも国旗はないでしょう。お茶屋にも、ないでしょう。花屋にも、いや花屋には……、でもやっぱり花屋に国旗は売ってないでしょうね。いくら晴れがましいものとはいっても。

歩きながら考えているうちに、玩具屋にありそうな気がしてきました。いや文房具屋かな？とも思いました。お正月によく使うトランプとか花札とか、カルタ、サイコロ、羽子板、百人一

首、あるいは書きぞめの道具とか、のし紙やお年玉の袋といったものは、たいていは文房具屋か玩具屋に売っています。だから国旗なども折り畳んで、そういうのに混じって売っているのではないでしょうか。

だけど文房具屋に国旗はありませんでした。玩具屋にもありませんでした。そうするとあとはどこでしょうか。先生ならこういうとき、どういう筋道で考えますか。私はもう筋道がぜんぜんなくなってしまって、出会った店を考えるだけです。カメラ屋……、ではありません。家具屋、家具？　あれ？　と思ったけど、ここにもありません。薬屋でもありません。ガーゼとか、赤チンとか、肌合いが日の丸の国旗に近い感じはするけれど、やはりここではありません。酒屋でもないでしょう。しかし酒屋には日本酒がある。日本酒は日本だ、国旗に関係ないだろうか。やはりないですね。そば屋。日本そば？　やはり違う。不動産屋でもないでしょう。郵便局。あ、郵便局には切手がある、ハガキもある。白いハガキって国旗に似ているような気がするけれど、やはり駄目ですね。銀行ではないでしょう。あ、日銀かな？　紙幣……国旗……、でもね。やっぱり違う。駅の売店のキオスク。うーん、これも駄目です。銭湯。駄目です。銭湯はタオルです。床屋。やはり駄目です。でも白地の広いのがある。白いシャボンも。それに剃刀でプスッと切った赤い血の玉、でもやっぱり駄目です。米屋、あ、米屋が怪しい。米屋が怪しいと思いました。白いお米。白いご飯。それに丸い梅干し。いやそういう感覚的なことは別にしても、あの、米の通帳というやつです。あれは何かただの商品を超えたものというか、商品における国家というか、あの通帳が昔は日本国民の証明だったし、ひょっとしたらいまでもあの米の通帳で、国民に国旗

をタダで配給しているとか……。

だけど結局どの店でも駄目でした。国旗はもうどこでも売っていないのでしょうか。私は駅前に立っていました。いっそのこと電車に乗ってデパートのある町まで行こうかとも思いました。デパートに行けば必ずあると思うのです。だけどここまで来た以上、デパートに行って国旗を買うなんて、それは何だか安易なやり方に思われてきて、とうとう私は挫折してしまい、とぼとぼと家へ帰りました。私があんまりとぼとぼと部屋にはいったので、母が見て、あらどうしたの？といっています。いやあどこにも国旗が売ってなくて、と私がいうと、母は、荒物屋にはないでしょうね、文房具屋にもないでしょうね、米屋なんかじゃありませんよといいながら、

「国旗はたしか、呉服屋さんじゃないかしら」

というのです。え？　呉服屋？　と思いました。まさかそんなところに、と思うけど、母は七十七歳。昔は軍国の母だったのです。私はもう一度立ち上がって呉服屋に行ってみました。

「はいはい、国旗はいまこういうのになっていますけど」

あったのだ、呉服屋というのは生地屋さんです。だから白地に赤いのも売っている。出して来たのを手に取ると、日の丸の旗の生地はナイロンでした。金の玉はプラスチックでした。竿もプラスチックの三段式。ワンセットで千三百円。私はホッとしました。だけどプラスチックの頼りない竿にがっかりしました。だけどそれを買って帰りながらまたホッとしました。

でお正月のことだけど、それからまだ年の暮までが大変でした。私も人並にきちんとお正月をしようと思うから、やはり国旗のほかにも人並に買物に出かけます。年の瀬が近づくにつれて町

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com